

一本の樹木と、建築

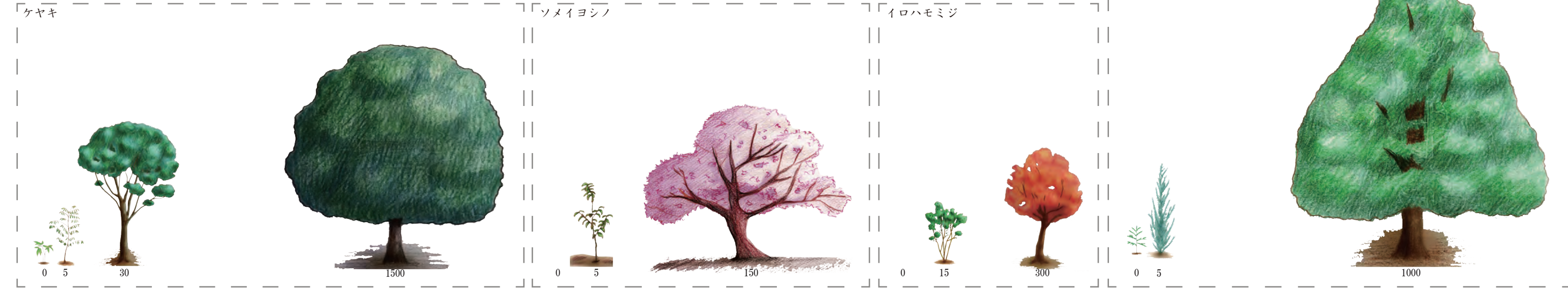
都市に森を作る新たな建築文明の提案



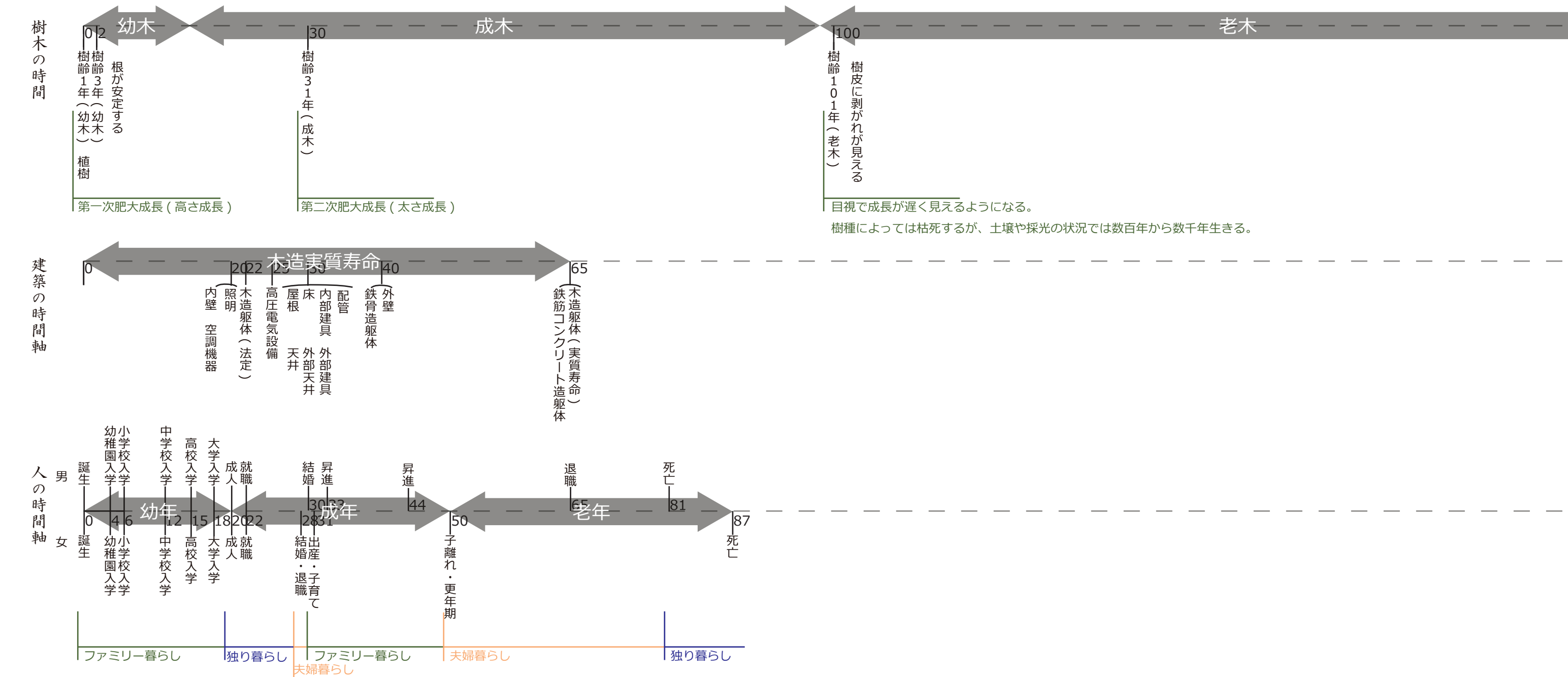
樹木成長図鑑（一部）

都心である東京に古くから自生している樹種の中で主に樹高 10 ～ 30m 以上に成長する高木を対象とし、各々の成長についての調査を行い、樹木成長図鑑を作成した。

この樹木成長図鑑から、樹種ごとの成長過程や枝張の変化の差異を知ることが出来る。



時間軸比較



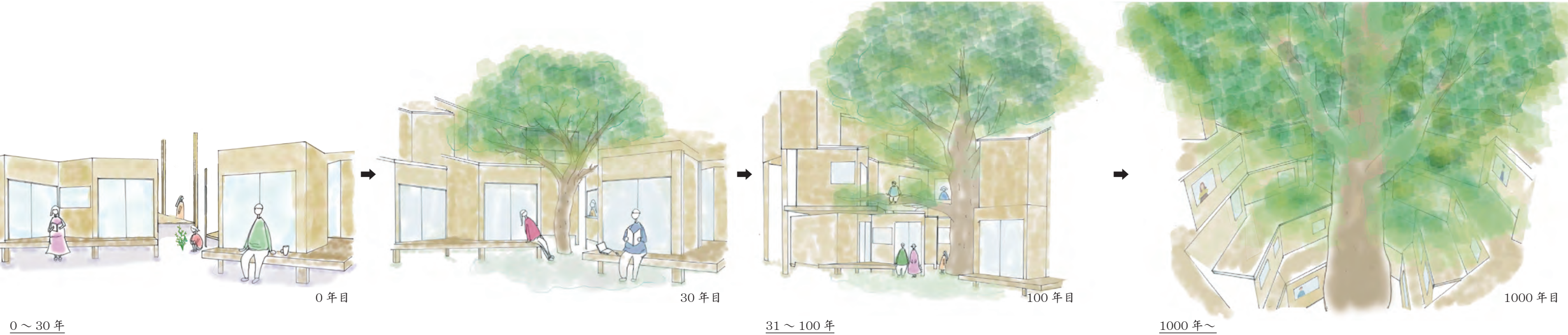
ボリューム変化

設計物の形状は樹木の成長を支えるように外側に開いていく。



設計提案

本制作のプログラムは、時を経るにつれて変わっていく



0年目に一本の苗木を植える。設計物の外形は変わらず、樹木のみ成長する。高さが急激に成長する30年目の樹木の高さに合わせた建築物は、0年目の樹木に対しては一見不釣り合いに大きく見えるが、30年間を経て、上から樹木を見る経験から樹木と並存する経験までを得る。

選定した敷地である虎ノ門五丁目は、オフィスの多い東京の一等地であり、敷地のすぐ隣には印刷所が建っている。また、今後数十年間特に港区では外国人人口が増加することを考え、外国人のための短期居住住宅が必要とされることが考えられる。そのため、0～30年目のプログラムとしては小規模出版社と短期居住住宅を提案する。

想定できる100年目の幹の太さに合わせて、0年目に建てた建築物の中心部を減築する。周辺RC造建築物の様相が変化することで、劣化したRC造、劣化した木造、築浅の木造の様相が存在する。

100年目にはさらに外国人人口が増加し、虎ノ門の人口は増加する。100年目のプログラムとしては、0年目のオフィスを継承するとともに、様々な国籍の外国人が一時的でなく、永続的に住み続けるための住宅を提案する。

1000年目には生と死が混在する樹木に沿うように、あらゆる年代に建てられた様々な劣化状態を保持する木造の様相を見せる。人々の営みは、樹木の成長と共に樹木に沿うように変化していきます。



1000 年目の営み

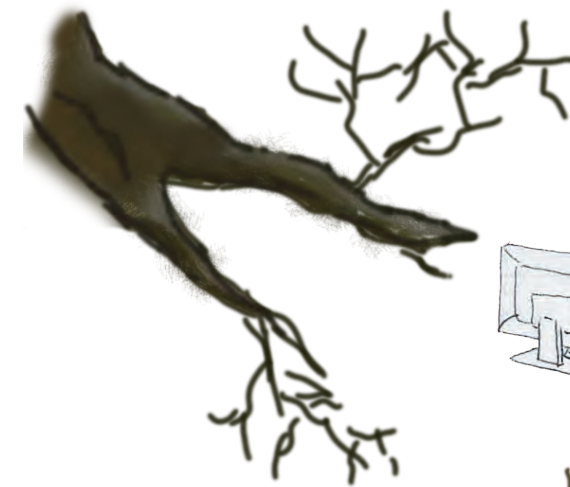
樹が触れる位置にあることが当たりまえの生活



枝をテーブルにして食事する



顔を洗顔を洗った先に樹が見える



枝が貫入する室内で仕事をする



樹の下で眠る



このような、樹木と共に生きる建築設計手法が日本の新たな都市成長の方法として全国の都心部に普及していくことを望む。

